

M-GTA 研究会 News Letter No.103

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（株式会社アクセライト内）

メーリングリストのアドレス：members@m-gta.jp

研究会のホームページ：http://m-gta.jp

世話人：阿部正子、伊藤祐紀子、唐田順子、菊地真実、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、隅谷理子、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾（五十音順）

<目次>

◇第90回定例研究会報告

【第一報告】..... 3

三輪 寛：自閉症スペクトラム障害の子をもつ親の障がいの受け止め方と関わりについてのプロセス—ソーシャルサポートとの関連から—

【第二報告】..... 15

細萱 伸子：海外勤務経験者の帰国後キャリアトランジション—日本人女性事例における適応行動とアイデンティティ

◇各地のM-GTA研究会活動報告26

北海道M-GTA研究会の活動報告

西日本M-GTA研究会の活動報告

◇近況報告29

阿部 オリエ（看護学／看護上の判断、臨地実習指導者、臨床判断、関わり、看護系大学生）

猪嶋 孝典（組織開発・人材育成／事業経営力強化、シニア人材活躍推進）

◇次回のお知らせ30

◇編集後記30

◇第 90 回定例研究会報告

【日時】2020 年 11 月 14 日（土） 13：00～16：30

【場所】オンライン（ZOOM）

【申込者】100 名

赤畑淳(立教大学)・阿部正子(名桜大学)・荒木善光(熊本保健科学大学)・有野雄大(筑波大学)・安藤晴美(山梨大学)・飯村愛(日本女子大学)・池田紀子(ルーテル学院大学)・石橋曜子(国際医療福祉大学)・伊藤祐紀子(長野県看護大学)・伊藤めぐみ(順天堂大学医学部附属順天堂東京江東高齢者医療センター)・井上務(日本福祉大学)・井上みゆき(和歌山県立医科大学)・猪嶋孝典(三井物産人材開発株式会社)・石見和世(帝京大学)・岩本記一(アール医療福祉専門学校)・上野千代子(京都先端科学大学)・宇田美江(青山学院女子短期大学)・内田貴峰(埼玉医科大学短期大学)・内海知子(鳥取看護大学)・大西敏美(香川大学)・小川直美(愛知県立大学)・小川優佳(聖カタリナ大学)・小澤景子(早稲田大学)・小畑美奈恵(早稲田大学)・風間眞理(奈良県立医科大学)・勝又あずさ(関西学院大学)・烏山房恵(一橋大学)・川崎友紀子(鳴門教育大学)・菊地彩花(聖路加国際大学)・菊地真実(帝京平成大学)・菊原美緒(防衛医科大学校)・木村和美(和歌山県立医科大学附属病院)・國井勇樹(早稲田大学)・汲田明美(愛知県立大学)・倉田貞美(浜松医科大学)・黒須依子(九州保健福祉大学)・桑原直弥(埼玉県立大学)・河野有美子(順天堂大学)・小林菜未(関西学院大学)・小林マリン(大正大学)・小山多三代(東京外国語大学)・酒井真紀子(早稲田大学)・佐川佳南枝(京都橘大学)・佐々木あゆみ(大正大学)・直原康光(筑波大学)・篠原実穂(帝京平成大学)・清水玲子(金沢医科大学)・下野史子(順天堂大学)・白澤麻弓(筑波技術大学)・鈴木まなみ(群馬大学)・鈴木泰子(抱生会丸の内病院)・鈴木博夫(筑波大学)・園川緑(帝京平成大学)・高祐子(複十字病院)・高橋国法(東京都市大学)・田川佳代子(愛知県立大学)・竹下浩(筑波技術大学)・丹野ひろみ(桜美林大学)・千葉文(横浜国立大学)・辻村真由子(千葉大学)・寺田由紀子(帝京大学)・都丸けい子(聖徳大学)・中込彩香(山梨大学)・永島すえみ(沖縄県立看護大学)・永田夏代(株湘南ユニテック)・長山豊(金沢医科大学)・西村美登里(関西国際大学)・根本愛子(東京大学)・根本ゆき(防衛医科大学校病院)・橋本友美(東京都立大学)・林葉子((株)JH 産業医科学研究所)・平井華代(岩手大学)・平川美和子(弘前医療福祉大学)・平塚克洋(上智大学)・廣田奈穂美(株式会社クレアディーバ)・夫博美(大阪信愛学院短期大学)・藤枝由美子(玉川大学)・船木淳(神戸市看護大学)・古川恵美(兵庫県立大学)・法華津明子(放送大学)・細萱伸子(上智大学)・堀尾志保(立教大学)・増田こころ(京都看護大学)・松戸宏予(佛教大学)・松元悦子(山口県立大学)・三橋礼子(国際医療福祉大学)・三宅美千代(非公開)・三輪寛(目白大学)・山居輝美(甲南女子大学)・山川伊津子(ヤマザキ動物看護専門職短期大学)・山口佳子(東京家政大学)・山崎浩司(信州大学)・山田美保(名古屋外国語大学)・山田典子(日本赤十字秋田看護大学)・横井優子(岐阜聖徳学園大学)・横山豊治(新潟医療福祉大学)・吉羽久美(東京都立大学)・渡邊節子(なし)・渡辺隆行(東京女子大学)・渡部亜矢(筑波大学)

【第1報告】

三輪寛（目白大学大学院生涯福祉研究科生涯福祉専攻修士課程）

**Hiroshi Miwa: Mejiro University Graduate School of Social Work Services Master's
Program in Social Work Services**

自閉症スペクトラム障害の子をもつ親の障がいの受け止め方と関わりについてのプロセス
—ソーシャルサポートとの関連から—

**How parents of children with autism spectrum disorder perceive and handle their
children's disabilities-in relation to social support-**

1. 研究の動機

筆者は、障害児通所施設に勤務している。日々の支援の中で、発達障害の子どもを抱える保護者は必ずしも支援に受動的ではなく、積極的に支援を獲得していくことも十分に考えられる。では、自閉症を抱える家族は支援を経験する中でどのように支援を捉え、継続の意欲を持つのだろうか。仮に支援者から支援を継続的に提供したとしても、それを継続する前向きな気持ち(モチベーション)が形成されていなければ効果的な支援を行うことに困難が生じるということも考えられる。よって、自閉症の診断 をもつ子どもを抱える親が支援を得ていく中で、どのように態度を変化させるのかを明らかにする必要があると考えた。

2. 研究の背景

自閉症の子どももつ母親は、精神的な問題を抱えることが多い。たとえば植村・新美(1985)は、自閉症児をもつ母親は、知的障害児をもつ母親よりもストレスが高いことを、蓬郷ら(1987)は、知的障害児、脳性麻痺児、ダウン症児をもつ母親と比べても、ストレスが高いことを報告している。湯沢ら(2007)は、知的障害のない自閉症児をもつ母親は、重度知的障害を伴う自閉症児をもつ母親よりも子どもの障害を受け入れられない気持ちが高いことを報告している。

当初、障がい児を持つ親の障がいを受け止める過程について、態度の変化、人間的な成長過程に対して注意が払われていた。例えば鱸(1963)は精神薄弱児をもつ親の受容過程を、(1)子どもが精神薄弱であることの認知過程(2)盲目的に行われる無駄な骨折り(3)苦悩的体験の過程(4)同じ精神薄弱児の親の発見(5)精神薄弱児への見通しと本格的努力(6)努力や苦悩を支える夫婦(7)努力を通して親自身の人間的成長を子どもに感謝する(8)親自身の成長、精神薄弱児に関する取り扱いなどを啓蒙する社会的段階、の8段階に分けた。そして第8段階目に親たちの態度の変化、人格的成長があると述べている。

その後、障害の受容過程が主に検討されるようになり、親の気持ちやストレスの関係に視点が向けられた報告はみられなくなり、親の障害受容について焦点があてられるようになった。「障がい受容」という概念は、当初中途障がいの「障がい受容」論の影響を受けた

考察がなされていたが、次第に障害をもつ子どもの親が、その障害を受容する段階についても議論されるようになった。

さらに、上田(1980)は、受容をリハビリテーションの最終目標として重視した。あきらめでも居直りでもなく、障がいに対する価値観の転換であり、障害をもつことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転じることと定義している。

そして、障害受容はショック、否認、悲しみと怒りの段階を経て、適応・再起するといった段階に従って、受容がすすむという段階説が考えられた。しかし、次第に受容がすすまないものが数多くいることがわかり、親は表面的に明るく見えても常に悲哀を抱えており、そうした感情に繰り返し苦しむという慢性的悲嘆説がうまれた。

このような背景を統合し、中田(1995)は障がいのある子どもの保護者のすべてが障害を受容できるとは限らないことを指摘した。「障害受容」とは直線的な適応過程の先にあるゴールではなく、適応過程すべてが障害受容ないしは障害受容の過程であるという障害の肯定と否定を繰り返す螺旋形の適応モデルを提唱し、現在に至っている。

その後障害受容論にかわり、保護者のストレス研究について報告が増え、これらの背景から中田(2017)は、保護者支援における研究者・実践家の関心が、保護者の「障がい受容」の支援から、保護者の心理的適応や困難性の支援へと移っている可能性があるとした。

たとえば、柳澤(2012)は、自閉症児・者は、障害特性への理解と対応の難しさ、社会からの障がいに対する理解が難しく、自閉症以外の障がい児をもつ親に比べてストレスが高いとしている。他にも松井ら(2016)は、親の会に参加する親の、子育てにおいて前向きな感情を獲得する過程を検討し、前向きな感情は、一度獲得しても子どもの成長や子育てによるストレス等により減少したり、それを喪失したりする可能性がある。そのため、前向きな感情を獲得するということは、獲得したことがあるという経験をしているが、前向きな感情と後ろ向きの感情が共存することもある状態を含めて獲得すると定義している。前向きな感情を獲得する過程のスタートは前向きな感情の認識に乏しい。子どもの特性に気づき戸惑いを感じている状態とし、そのゴールは子育てに対する気持ちの揺れを感じつつも子どもを育てていてよかったと感じ、今後も育てていけると思うことができる状態とすると述べている。母親は子育てを模索することにより、子どもの特性の理解へとつながっていたと述べている。

3. ソーシャルサポートの先行研究

厚生労働省(2008)は、ソーシャルサポートを「社会的関係の中でやりとりされる支援。健康行動の維持やストレスの影響を緩和する働きがある。」と定義している。

ソーシャル・ネットワークといった人間関係によりもたらされる援助のことを意味し、ソーシャル・サポートには、情緒的支援・道具的支援・環境についての情報支援、情報提供などがある。直接的に心理的ストレスを低減したり、間接的にストレスフルな状況に対する認知

パターンに働きかけたりして、身体的健康を促進する効果を持つものである。また、ライフステージに対応した一貫した支援を行うため、支援関係機によるネットワークの構築を推進している。

子育てにおけるソーシャルサポートについては、日々の子育てのストレスから生じる心身の健康状態を緩衝する要因として、ストレスに対処するコーピング方略と周囲からの理解や支援などがあげられる（北川・七木田・今塩屋，1995）。

Cobb（1976）は、ソーシャルサポートを「世話され、愛され、尊敬され、そして相互扶助の関係にある組織の一員である、と信じさせるような情報がソーシャルサポートである」と定義している Lazarus& Folkman（1984）のストレス認知理論が提唱された 1990 年代以降、ソーシャルサポートと心身の健康との関連性について研究がなされてきた。

(1) フォーマルサポートに関する先行研究

障害児を持つ母親の育児ストレスに対しては、ソーシャルサポートと育児ストレスの関連についての先行研究がある。その結果フォーマルなサポート源としては、医療機関、公的な療育機関・相談機関、保育園や幼稚園などが重要視されている（北川ら，1995）。

さらにフォーマルなソーシャルサポートが障害児をもつ母親の心理に与える影響を調べた松尾・加藤（1995）の研究によれば、育児ストレス認知の軽い母親は、早期発見、早期対応を経験し、かつ専門性の高い医療を使用していたことから、フォーマルなソーシャルサポートが有用であるとされた。

また、療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親についての研究では、専門家からのサポートが心理的安定につながるということが明らかにされている（湯沢・渡邊・松永，2007）。また、療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親は、療育機関が子どもの良い成長だけでなく、母親の精神面にも良い影響をもたらし、専門家からのサポートは心理的安定につながることを明らかにしている。（山田，2010）

(2) インフォーマルサポートに関する先行研究

インフォーマルサポートとは、非制度的・非契約的な個人的取り決めに基づく関係のことをさす。インフォーマルな支援者は、多くの場合、家族が代表される（稲葉 2013）。また、情緒的サポートは、生活上経験する問題や困難を軽減する効果があることや抑うつ・不安などの症状を軽減する効果が確認されている。（稲葉 1999）。

そして、インフォーマルサポートは障害児（者）の親、特に養育に伴うストレスや情緒的な問題への効果が高いとする報告は多い。

たとえば北川（1995）は、(1) 夫婦親密性サポートは、母親の日常的なストレスに効果がある。(2) 療育的なサポートは日々の育児から生ずる一時的なストレスの軽減に効果がある。(3) 近隣的なサポートも母親の精神的健康を良好に保つ効果を持つ。(4) 実行されたサポートの結果から、母親のストレスレベルが高いとき援助的な言動を多く受けることは、精

神的健康を低下させる可能性があるとしている。

又、北川ら（1995）は近隣からのサポートの効果を検討している。療育などで知り合った人々との心のふれあいは、母親の心を和ませるが、真の心理的安寧をもたらさず、近隣や保育園などで知り合った人々との理解や心のふれあいは、母親のストレスを軽減することを明らかにしている。このことから近隣が障害幼児を養育するうえで助けになると認識する母親が、ストレスに最もうまく対処し、精神的健康を良好に保っていると報告している。しかし母親のストレスが高い場合は、援助的な言動を受ければ受けるほど母親には負担となり、結果的に自らの精神健康度を低下させてしまうという場合もあり、障害児を持つ母親のストレスとサポートの関係は複雑であり、詳細に検討することが課題としてあげられている（北川ら、1995）。

4. 研究目的

これらの背景から、これまでの障害受容とソーシャルサポートに関する研究動向として、障害受容とソーシャルサポートが自閉症を持つ親の精神的な問題にどのような影響を与えることができたか、先行研究を概観した。そして、自閉症と診断された子どもをもつ保護者が子どもの障がいの告知を受け、支援を経験するプロセスにおいて、感情がどのように変化するか。そのことにより、保護者の障害の受け止め方や子どもへの関わり方に変化がみられたかを検討した。研究テーマを「自閉症と診断された子どもをもつ母親の立場から、気づきから支援を経験するプロセスにおいて、母親の子どもへの関わり方についての変容と保護者自身の気持ちの変化についての検討」とした。

5. M-GTAに適した研究か

今回の研究においては、自閉症と診断された子どもをもつ保護者が障害の告知を受け、支援を経験するプロセスにおいて、感情がどのように変化するか。そのことにより、保護者の障害の受け止め方や子どもへの関わり方に変化がみられたかを検討する為、プロセス的性格をもった社会相互作用を扱うことのできるM-GTAによる分析が妥当であると思われる。

6. 分析焦点者

「自閉症の診断をもつ子どもを養育する保護者」とするため、障がいの子をもつ子どもの保護者で、東京都自閉症協会、世田谷区手をつなぐ親の会、横浜市障害児を守る連絡協議会、大田区手をつなぐ育成会で活動している自閉症の診断をもつ子どもの母親10名を対象にした。属性を次に示す。

事例	年齢	配偶者	子どもの年齢	性別	利用中のサービス	きょうだい
協力者A	50代後半	あり	20代	男	作業所	なし
協力者B	40代後半	あり	20代	男	なし	5歳上の姉
協力者C	50代後半	あり	20代	男	作業所	2歳上の兄
協力者D	50代後半	あり	20代	女	入所施設	2歳上の姉
協力者E	50代後半	あり	20代	男	ホテルの厨房	2歳上の兄
協力者F	50代後半	あり	20代	男	病院のベッドメイキング	8歳下の妹
協力者G	50代前半	あり	30代	男	作業所	3歳下の妹
協力者H	60代前半	あり	20代	男	障がい者就労	3人きょうだいの末っ子
協力者I	60代前半	あり	30代	男	重度更生施設（福祉園）	1歳上の兄
協力者J	60代前半	あり	30代	男	就労移行支援	3歳違いの妹と7歳違いの弟

7. 研究方法の概要

(1)分析方法

分析方法は、インタビューによって得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下：M-GTA）を基盤にして分析した。M-GTAとは、データから概念を生成し複数の概念間の関係を解釈的にまとめ、概念関係図として提示することで質的データの解釈をする研究法のひとつであり、GlaserとStraussのグラウンデッド・セオリー・アプローチの特性を活かし改良した分析方法である。この方法は人間と人間が直接的にやりとりをする社会的相互作用（木下、2003）を分析するのに適しており、また認識や感情の動きのプロセスを対象とすることができる点が特質である。

分析テーマは「自閉症スペクトラム障害の子をもつ母親が、ソーシャルサポートなどの支援を受けることにより、母親自身の関わり方や行動に変化をもたらすプロセス」とした。

分析過程では10事例に関して面識を持っていない研究助言者に分析が妥当であるかどうか判断を受けた。

(2)インタビュー調査の概要

インタビュー調査は研究者が用意した、インタビューガイドを基に半構造化面接にて行った。インタビュー内容は自閉症と診断された子どもをもつ保護者が障がいの告知を受け、支援を経験するプロセスにおいて、感情がどのように変化するか。そのことにより、保護者の障害の受け止め方や子どもへの関わり方に変化がみられたかを明らかにするため、対象者の属性(家族構成、主たる養育者、発達障害支援センター、特別支援教室の利用の有無など)の他に、【子どもが障害をもっていると気づいた時期】【それに対して親の反応】、【家族以外のサポートを利用しようと思ったきっかけ】、【誰かに相談しようと思った時期】、【支援を得ることでの気持ちの変容】【子どもに対して関わり方の変化】【子どもの将来の見通し】など保護者の子どものとらえ方とその行動を焦点とした。面接内容は協力者の同意を得たうえで録音し、面接終了後にトランスクリプトを作成した。面接時期は、平成30年8月から同年11月までである。インタビューの所要時間は平均で75分であった。

インタビューガイド

【属性】

- ①家族構成、年齢
- ②主たる養育者
- ③養育者の職業の有無、就業形態
- ④診断名
- ⑤支援の種類(発達支援センター、療育施設、特別支援教室、親の会など)

内容

- 【子どもが障害を持っていると気づいた時期、告知について】
- 【それに対して親(自分の親)、周囲の反応】
- 【誰かに相談しようと思った時期】
- 【支援を得ることでの気持ちの変化】
- 【子育て環境、周囲との関わり方の変化】
- 【子どもに対して関わり方の変化】
- 【子どもの将来の見通し】

8. 分析ワークシート例

概念名①：発達遅延の気づき

定義：健診前に発達の遅延に気付くこと。

うちは長女、姉がいるので最初にこう育てているので、違いというところで。
1歳ぐらい過ぎても、まあ言葉も出てこないし、歩いたのは1歳ぐらいかな。

けど、言葉がないっていうのが一番、おかしいなと思った 協力者 A

だいたい 1 歳ぐらいから、ちょっと遅いかなーと上の子と比べてですけど。喃語っていうんですか。それしか出てなかったから。協力者 C

当時、私は障がいというふうには、はっきり思っていなかったんですけど。やっぱり発達に心配はありました。協力者 F

(対局例)何度もこう保健師さんに「指差しはしたことはないですか」と言われて、そんなことに関心をもったことがないもので。

まあそれこそ、なにを言ってんだって感じですよ。ね。「あと、言葉は出てますか」と言われて、一語もなかったです。一語も発声がなくて、それも別になんとも思わなかったんですよ。協力者 H

理論的メモ

検診が始まる前に多くは母親が発達の遅延に気付く
多くは遅延していることに不安を感じる

(概念・カテゴリー)

気づき・混乱

カテゴリー1 子どもの行動やしぐさを観察して戸惑いを感じた時期

概念 1 息子の様子に違和感があると気づく

概念 2 周囲からの言葉に不安を感じた

概念 3 何処に行くか分からない

覚悟・前進的な気持ち

カテゴリー2 医者から診断や周囲の意見を得て、自分の気持ちが変わるきっかけになった

概念 4 診断を受けて自分の関わり方は悪くないとほっとした

概念 5 診断を受けて覚悟が決まったこと

概念 6 夫の子どもに対する理解との温度差

この先の見通し

カテゴリー3 子どもの可能性を信じ、子どもにあった療育方法を見つける過程

概念 7 子どもにあった療育に悩み始めたこと

概念 8 通園施設の対応に困惑を感じたこと

概念 9 自分の生活を犠牲にして生活のほとんどを療育に没頭したこと

子どもを受け止める

カテゴリー4 子どもの成長がわが子を受け入れるきっかけとなる

概念 10 学校の先生の対応により環境を調整することができた

概念 11 環境の変化が子どもを成長させた

概念 12 年齢を経るにつれ親子ともに成長できた

※(修士論文提出時に作成。カテゴリー、概念ともに再度生成中)

9. 倫理的配慮

本研究では研究対象者に対して、同意書に署名・捺印を相互に交わした。具体的には、各調査協力者の守秘義務を徹底した上で情報提供するよう事前に注意喚起し、自由意思による参加、筆者によるプライバシーの厳守、データの取り扱いの守秘義務、研究以外の目的には使用しないなど、倫理的要件について事前に説明し了承を得た。

発表に際しては、個人が特定できないようにすることを約束し、インタビュー内容を記録することについて同意を得た。なお、本研究は筆者が所属する目白大学における人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得て実施した。

10. 発表を終えて

1) 会場からのコメント

- ・母親のストレスとは、具体的にどういうことか。(インフォーマルサポートのスライド)
- ・障害受容の先行研究は知らないのではないか⇒研究との関連性がないと判断しました。
- ・研究と関連性のある先行研究の見直しが必要
- ・プロセスの範囲が広く、スタートとゴールが明確でない
- ・M-GTAというよりはライフストーリー研究法では？
- ・この研究を今後、どのように活かしたいのか

2) 感想

ほぼ、修士論文提出時の審査で言われたことを先生方からご指摘いただきました。とても貴重な体験をさせていただきました。論文執筆以前に、M-GTAの分析方法を、完全に理解していないと認識しました。

又、発表用のスライドも意味不明な点が多く、諸先生方にはご迷惑をおかけし、大変申し訳ございませんでした。今後は、基本に立ち返り研究方法をしっかりと理解し、スクリプトの見直しをするとともに、研究目的と分析テーマ。この研究を今後、どのように活かしたいかを明確にしたいと思います。これが定まってないと論文を作成するのは厳しいかと思えます。

最後に、都丸先生。お忙しい中S Vを引き受けていただきましてありがとうございました。先生からのコメントをなかなか文章化できず、時間がかかってしまい大変申し訳ございませんでした。

《主要文献》

- ・DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引, 原著: American Psychiatric Association, 日本語版用語監修: 日本精神神経学会, 監訳, 高橋三郎/大野裕.
- ・木下康仁(2007)(2017 初版 9 刷). ライブ講座 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて, 弘文堂, 東京.
- ・木下康仁(2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法, 富山大学看護学会誌, 第 6 巻 2 号.
- ・植村勝彦・新美明夫(1985), 発達障害児の加齢に伴う母親のストレスの推移—横断的資料による精神遅滞児と自閉症児の比較をとおして—, 心理学研究, 56 巻, 第 4 号, 233-237.
- ・篠郷さなえ・中塚善次郎(1987), 発達障害児をもつ母親のストレス要因(I), 鳴戸教育大学教育研究センター紀要, 第 1 巻, 39-47.
- ・八重鯉大府, 奥野雅子(2016), 発達障がいを抱える家族への支援プロセスに関する一考察, 現代行動科学会誌第 32 号, 20-30.
- ・鑓幹八郎(1963). 精神薄弱児の親の子供受容に関する分析研究. 京都大学教育学部紀要, 9, 145-172.
- ・高瀬安貞(1967). 青年期と身体障害 27, 水野祥太(監修)リハビリテーション講座第 3 巻, 一粒社, 307-334
- ・上田敏(1980). 障害の受容—その本質と諸段階について—総合リハビリテーション, 8, 512-521.
- ・中田洋二郎(1995), 親の障害の認識と受容に関する考察—受容の段階説と慢性的悲哀—. 早稲田心理学年報, 27, 83-92.
- ・中田洋二郎(2002), 子どもの障害をどう受容するか 家族支援と援助者の役割, 大月書店, 30-47, 76-86.
- ・桑田左絵・神尾陽子, 発達障害児をもつ親の障害受容過程についての文献的検討から, 九州大学心理学研究, 第 5 巻, 273-281.
- ・柳澤亜希子(2012). 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性.

特殊教育学研究 50 巻, 4 号, 403-411.

・中田洋二郎(2017). 発達障害における親の「障害受容」—レビュー論文の概観—. 立正大学心理学研究年報, 第 8 号, 15-30.

・三木陽子(1998). 障害児をもつ母親の「ふっきれ感」—ソーシャルサポートによる考察(ショートレポート). 性格心理学研究, 第 6 巻, 第 2 号, 150-151.

・松井藍子, 大河内彩子, 田高悦子, 有本梓(2016). 発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程. 地域看護学会誌, 19, 2, 75-81.

・小林倫代(2008) 障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第 35 国立特別支援教育総合研究所研究紀要国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 35, 75-87.

・稲垣真澄 発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究(独立行政法人国立精神・神経医療研究センター,精神保健研究所)

・鈴木 浩太, 小林 朋佳, 森山 花鈴, 加我 牧子, 平谷 美智夫, 渡部 京太, 山下 裕史朗, 林 隆, 稲垣 真澄(2015).自閉症スペクトラム児(者)をもつ母親の養育レジリエンスの構成要素に関する質的研究, 脳と科学, 47 巻, 29-34.

・宇津貴志, 伊藤弥生.(2014)自閉症の子を育てる親の心理の理解に関する研究の現状と課題,九産大国際文化学部紀要, 2014, 第 58, 91-99.

・障害児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響.北川 憲明・七木田敦・今塩屋隼男, 1995, 特殊教育学研究, 33 (1), 35-44.

・湯沢順子・渡邊佳明・松永しのぶ(2007).自閉症児を育てる母親の子育てに対する気持ちとソーシャルサポートとの関連, 昭和女子大学生活心理研究所紀要,119-129.

・尾野 明未, 茂木 俊彦 (2012). 障害児をもつ母親の子育てストレスへの対処とソーシャル・サポート について—多母集団同時分析による健常児との比較検討—, ストレス科学研究, 23-31.

・植松勝子(2018).発達障がい児の早期支援に関する研究 — 障がいの「気づき」から専門相談までの保護者の対応について — 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要第 19 号, 1-12.

・市川奈緒子(2017). 保護者がわが子の「特性」に気づくとき —健診から療育へ—, 発達障害の子を育てる親の気持ちと向き合う, 金子書房, 11-19.

・山根隆宏(2010). 高機能広汎性発達障害児・者の母親の障害認識過程に関する質的検討, 家庭教育研究所紀要 No. 32, 61-73.

・木曾陽子(2016). 母親の気づきと行動のプロセスの構造, 発達障害の可能性のある子どもへの保護者支援, 晃洋 書房, 第 3 章, 第 3 節, 94-98.

・行動障害児(者)研究会(1989),強度行動障害児(者)の行動改善および処遇のあり方に関する研究, 財団法人キリン記念財団.

・一般社団法人全国児童発達支援協議会 (2013)児童福祉法改正後の障害児通所支援の実態

と今後の在り方に関する調査研究.

《参考文献》

- ・ K・エリス編, L・ウイング他著(1997), 自閉症、幼児期から成人期まで, 久保紘章・井上哲雄監訳, ルガール社, p11-p42.
- ・ 三浦伽奈子(2016).発達障害児の肯定的自己理解とその母親の障害受容を促すソーシャルサポート, 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,第 15 号,301-316.
- ・ 松本恵美子.(2018).乳幼児期の発達障害への気づきと保護者支援,社会問題研究第 67 巻,161-169.
- ・ 文部科学省(2017).発達障害を含む障害のある幼児,児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン.

【SV コメント】

都丸 けい子 (聖徳大学)

1. 背景・目的と研究テーマについて

三輪さんの研究テーマは,「自閉症スペクトラム障害の子をもつ親の障がいの受け止め方とかかわりについてーソーシャルサポートとの関連からー」です。つまり, 自閉症と診断された子どもを持つ母親の立場から, 気づき方支援を経験するプロセスにおいて, 母親の子どもへのかかわり方についての変容と保護者自身の気持ちの変化について明らかにしたいというものでした。

2. SV の過程について

「昨年度, 修士論文としてまとめることを試みたけれども上手くいかなかった」ということでしたので, 初めに本研究の背景と目的・意義と共に, 上手くいかなかったのはどういった点であったのかについて具体的に尋ねました。送っていただいた資料及び三輪さんとのやり取りから得られた情報に鑑みると, 分析テーマ絞り込みが不十分なまま分析が進められてしまっていることは明確でした。そこで, 「何(どのような『なぜ?』)について明らかにしたいのか?」, 「どのような形で研究結果の応用について考えているか(第3のインタラクティブ性)」といった問いを投げかけました。つまり, 分析テーマを絞り込むためのやり取りから始めたのです。ところが, 三輪さんの明らかにしたいことを伺うにつれ, 「根本的な問題として, 研究テーマに適した方法論を吟味することから始めた方がよいのではないか?」といった懸念が生じました。このような背景があったため, 後半は方法論についての議論が多く取り上げられました。今回の M-GTA の分析についての SV を行う機会をほとんど設けることができなかったこと, 三輪さんにはとても申し訳なく思っています。

3. 本 SV の振り返り

私自身の自戒の意も込めて, 今回の SV を通して学ばせていただいた3点について振り返りたいと思います。

第1に、基本的な事柄ですが、SVを始めるにあたり、SVを受ける側のM-GTAに関する理解度の程度を的確に把握しておく必要性です。特に、分析上の用語の意味について共通見解を持てるかどうかを、SVを受ける側と事前に確認しておく必要があります。SVを行う側が「M-GTAで用いられる用語の意味に関しては、当然（ある程度は）わかっているであろう」とのスタンスでSVを開始してしまうと、SVを受ける側が消化しきれない言葉を投げかけてしまう可能性があります。ただし一方で、やはり「M-GTAが導入する分析上の用語」の意味について理解しておくことは、定例研究会発表者がSVを受ける上での条件でもあります。したがって、木下先生の最新著作である『定本 M-GTA』の54～60頁に挙げられた用語の（ある程度の）意味理解に関しては、SVを受ける最低条件と認識していただければと思います。

第2に、SVはやり取りであるという点を忘れてはならないという点です。メールでのSVの場合、口頭ではなくテキストベースで進んでいきます。テキストベースですと、私はつい、複数の問いをまとめて投げかけがちになってしまうことに気がつきました。初学者にSVを行う際、分析テーマを絞り込む段階においては特に、問いの数と範囲を絞り込み、深い思考を促すような配慮がSV側に求められます。今回のSVのやり取りの中で、最後まで三輪さんからの回答を得られなかった問いもありました。それは、問いを発するタイミングや、複数の問いを投げかける際の優先順位の提示に留意できなかったSV側の要因も大きかったのではないかと考えています。

第3に、M-GTAに適した研究ではないと判断した際の、SVの方向性についてです。M-GTAは、プロセス性に関する理解への誤りがしばしば生じます。「プロセス」と「社会的相互作用」という2つのキーワードから、「M-GTAは『社会的相互作用が含まれる時系列的なプロセス』を明らかにできる方法論である」と判断されがちです。しかし正確には、M-GTAで扱うプロセスは、「社会的相互作用によって『展開していく』プロセス」のことを指します。分析の結果、導き出されるのは説明モデルであり、そこには常に現実の応用者の存在が欠かせません。もしも、M-GTAに適した研究ではないと判断した場合に選択できる方向性は2点です。1つ目の方向性は、方法論ありきから脱却し、より研究テーマに適した方法論を検討しなおすことです。これが本来の研究のあり方であると考えています。もう一方は、「社会的相互作用によって『展開していく』プロセス」の視点から分析テーマを立て直すことです。すでにデータが得られていて、そのデータの中にプロセス性が見いだされたとしたら、それが分析テーマの候補となります。一方、もしもリッチなデータを得ることができていなければ、分析テーマとインタビュー項目の再検討が必要になるでしょう（この場合、すでに調査に協力してくれた人に対して不誠実な判断となります。したがって、なるべく既に手元にあるデータを活かせる方向性で…と私は思っています）。2点目に関しては、通常の「分析テーマの絞り込み」と同様の作業ですが、ここでは「どのような形で研究結果の応用について考えているか（第3のインタラクティブ性）」がポイントになると考えます。

4. 定例研究会での発表を終えて

今回のSVでは、多くの（多すぎるほどの…）問いを三輪さんにお渡ししました。時間的な制限もあり、回答を得られなかった問いも残っています。定例発表会は終わりましたが、三輪さんの研究は現在進行形です。残りの問い及びフロアから投げかけられた問いに取り組んでいただき、修士論文としての質を担保した研究論文の完成を目指し、頑張ってください。

【第2報告】

細萱伸子（上智大学経済学部）

Nobuko Hosogaya : Faculty of Economics, Sophia University

海外勤務経験者の帰国後キャリアトランジション-日本人女性事例における適応行動とアイデンティティ-

Career transition of Japanese female repatriates: Adaptation and identity reconstruction in home land

1. 研究テーマ

(1)問題の背景

日本の企業社会では、伝統的に女性の海外勤務は男性と比較して少なく、また企業内でも不利であると考えられてきた。だが、現在では、企業内派遣者のみならず、自発的な海外赴任者も含めて、海外で働く女性は増加している。自発的海外赴任者とは、企業からの派遣によらず自分自身の意思と費用で海外渡航し、現地で就職する労働者のことである。企業派遣者と比較して、自分のコスト負担であること、渡航から職探し、現地での生活面や職場での適応などについて、組織的な支援が受けられず、自己責任で行うことなどが特徴的である。女性の場合、海外でも日本でも、男性と比較して、女性の自発的に海外へ赴き現地採用される比率が圧倒的に高いという報告もある（丹羽 2018）。

女性の帰任は、企業内転勤からの帰国であるというより、自発的赴任からの帰任である確率も高く、その分、より多くの課題を含んだ転機となることが予測される。彼女たちが帰国したのち、適正に活用されるためにはどのような条件が必要なのだろうか。こうした人材たちが、帰国後日本国内でキャリアを展開する際に、どのように意欲を保ちつつ貢献していくのかは、今後の日本企業社会の大きな課題である。

本研究は、海外で就業経験のある女性たちが、帰国後再就職や再配置という転機を乗り越えていくのかを、国内で展開されているキャリアトランジション論を援用しながら検討した。本研究には、海外から帰国したことによる日本への再適応問題と、キャリア上の転機に際して自らの労働市場内での新しい役割の引き受けとそれに対する本人と周囲の感情や自己認識の変化など多様な論点が

入りうるため、以下のような先行研究を参照した。

(2) 先行研究

テーマに関して調査、分析するにあたって、日本人海外派遣経験者の帰任と帰国後再適応に関する研究、および、同じく日本人を対象にしたキャリアトランジション論を参照した。

帰任者に関する研究は、日本人で海外派遣されていた駐在員たちが母国である日本の職場に帰任するにあたって、海外赴任時と同様に、帰任後の再適応が問題となると指摘する。企業にとって、帰任者は海外で経験を積んだ貴重な人材であり、その組織的活用を図ることが重要だとの意識(古澤 2011、内藤2012)があるため、海外赴任経験者の帰任問題は、個人レベル、企業レベル双方が関与し、企業側にも責任のある問題(内藤 2015)として、研究が進められている。海外赴任から帰任に至るプロセスを、組織にとっても個人にとっても問題なく効果的に進めるためには、海外での適応、帰国した帰任後の再適応、帰国後のキャリア展望と赴任経験の関係が重要な課題となる(内藤 2009)。

特に帰国後の再適応問題を扱う研究は、帰任者の再適応に関して企業側の責任を重視する。具体的に再適応問題は、「認知的ギャップ」と「帰任時の困難さ」に分けられ、「認知的ギャップ」は、本国の組織、仕事および生活環境の変化に関する認識を、「帰任時の困難さ」は仕事面の問題と生活面の問題を主に対象とする。これらの問題については、情報提供、理解と配慮、処遇と制度の整備(内藤 2009)を通じた解決や、上司の役割の重要性(内藤 2011)が主張され、帰任前からスタートする、帰任後の職場生活への正確な期待の形成と事前適応を促進する施策が重要(古沢 2011)とされる。あくまでも海外に赴任させた従業員の再適応は会社側の責任として、そのコストと労力の負担が当然のこととして理解される。

こうした人材たちの帰国後のキャリア展望については、重要だとされながら、あまり先行研究がない。これは、日本企業の雇用慣行と大きく関連して、帰国後のキャリア展望を描く自由が基本的にはないことと関連すると思われる。海外勤務経験者の帰国後キャリア展望について、一般的に考えられるのは、企業内での配置転換の一環である帰国後の再配置について、個人は希望を述べることはできても、その希望が実現するとは限らないという「常識」だろう。あくまでも配置転換であるので、各企業の配置転換に関する施策によって、どの程度個人の希望が考慮されるかなどが変わる。したがって、帰任後のキャリア展望を実現する制度を設計する責任は企業の側にあり、個人は基本的に命令に従うか、いやならば転職するということになる。

日本の会社員についてのキャリアトランジション研究は、配置転換という制度にキャリア展望を制限される中での、長期勤続の慣行をベースに、様々な転機を乗り越える人々の研究が行われてきた(金井 2002a,2002b)。個人は自らの職務経歴に直結する職場配置を自分の意思によって決定できないため、個人の職業的な将来見通しは不透明になりがちである。コントロールできないことは、個人にプレッシャーやストレスを与える。その中でも個人のコントロールを向上させるスキルとして、「組織からの要請をかわす」「交渉力を向上させる」などが指摘される(加藤・鈴木 2007)。当然、職務に必要な能力も社内経験をベースに構築されていくので、「母港とライフテーマが高いパフォ

ーマンスを発揮するために重要」(平野 1999)と説明されている。ここでの母港とは個人の経験の中核になるような担当領域やそのスキル体系で、個人が組織へ貢献するにあたっての基盤ととらえられる。また、ライフテーマとは、個人の人生を引っ張るような目標(ストライビングゴール)と述べている(平野 1999, p.94)が、一方で、強いテーマはとらわれのもとになるため、そこからの解放を求めるもともとなると指摘される。

以上の先行研究から、海外からの帰任者の再適応のプロセスでは、帰国という大きな転機を乗り越えながら、仕事面、生活面を含めた認識や、組織や家族といった関係者との交渉、状況をコントロールする個人の力量があり、その力量の形成や発揮がポイントになると思われた。さらに、個人の人生を引っ張る目標が何らかの形でその力量形成と関連すると考えられるが、仕組みはよくわからなかった。またこうした研究は、主に長期勤続を旨とする男性主体の研究であり、女性について適用するには、明らかになっていない部分も多いと考えた。

2. 研究課題とリサーチクエスチョン

本研究では、海外赴任経験のある女性の帰国と再就職、再配置という転機の乗り越えとその後の展望を描くプロセスとしてキャリアトランジションをとらえようとした。そのプロセスの構成について分析しながら、そのプロセスで、経験される活動を明確化し、コントロールしようとする個人の活動とそこでの周囲との関係における動きを理解すること、またキャリアを引っ張るゴールの確認や、とらわれからの解放が具体的にどのような形で発現するのも重要なテーマであると考えた。

RQ:海外就業経験のある女性の帰国にともなうトランジションは、どのようなプロセスで展開し、個人にどのような影響を与えるのか。特にキャリアに関する個人主体の意思決定、および環境としての企業内外のジョブ・マーケットへの対応に関して労働者側にはどのような意識と行動が見られ、自己にかかわる意識のどのような動きや将来への見通しや希望が創出されるのか。

3. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究は、再適応やトランジション(転機の乗り越えとその後の安定)というプロセスにおいて、個人が周囲とかわす相互作用に基づいた認識の動きを検討するため、適していると判断した。特に、分析スタート時に参照した論文の一つが以下の岸田論文であったが、そこでは、高齢者が職場の作業現場での関与を低減させながら、自らの新たな役割を見いだしていくプロセスを分析していたため、本研究にも MGTA の手法が適用可能であると考えた。

主要参照論文: 岸田泰則 2018 高齢雇用者のジョブ・クラフティングの規定要因とその影響—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチからの探索的検討、日本労働雑誌 2018 年特別号 (No.691)

その後 SV の竹下先生とのコミュニケーションにおいて、M-GTA が社会的相互作用にフォーカスし

た手法であって、相互作用の相手とのあいだでの行為(相手への働きかけ＝方略)の視点が不可欠である、結果図は、特定文脈での固有の長期的な関係性の移行、移行条件、各段階での相互方略を示す必要があるとの指摘をいただいた。

その段階の分析では、確かに社会的相互作用について検討するという視点が弱かったため、改めて分析全体を見直し、あらためて相互作用にフォーカスをして分析をしてみようと考えた。ただし、キャリア形成の中の職探しのフェーズでは、必ずしも特定文脈での長期的な関係性が維持されているケースばかりではなかったため、相手への働きかけという方略を確認できるかどうか極めて不安を感じる事となった。

一方で、そうした不安を感じながら、実践対象者について考えると、相互作用が確認できた相手を検討していけばよいのだと気づいた。本研究の場合は、帰国後に就職活動を支援してくれる、キャリアサービスの支援員やコンサルタントの人々、企業の採用担当者、職場の上司を、実践担当者として規定することとした。

4. 分析テーマへの絞込み

上述の経緯から、以下のような分析テーマを決めた。当初は(1)のように規定していたが、SV からの指摘をいただいて、(2)のように変更した。

(1) 当初の分析テーマ

「海外就業を済ませた女性が帰国し、職探しと能力発揮を通じて、自らに関する認識を確認しキャリアを導く課題を編み出すプロセスの研究」

(2) アドバイスを受けた後の分析テーマ

「海外就業を済ませた女性が帰国し、職探しと能力発揮を通じて就業を継続していく過程において、関与者との関係性やマーケットにおける思惑に反応しながら、仕事の意味に関する認識を確認し変化させ、将来展望を描いていくプロセスの研究」

5. インタビューガイド

海外赴任から帰任、その後の再就職までのプロセスにおける職業経歴、職場での経験、今後の計画や展望、様々な意思決定に際して相談、影響を受けた相手、結婚などのプライベートに関する情報について、半構造化面接を行い、できる限り調査協力者が話しやすい方法で話してもらうようにした。

6. データの収集と範囲

報告者、共同研究者の友人からスノーボールサンプリングで集めた。調査は 2019 年 9 月から 11 月にかけて行った。海外で就業経験したのち、帰国し、就業を継続している 30 代から 40 代、フルタイム就業の女性 10 名とのインタビューである。海外での就業経験とは、企業による派遣、あるいは

は本人の自発的な海外への移動によって海外でフルタイムの被雇用者としての就業経験を持つものとした。インタビューは研究倫理に配慮した方法を説明したうえで開始し、すべてを録音し、書きおこしをした。

海外就業年数の平均は3.5年であった。海外赴任のきっかけには、企業内転勤者、自発的に海外で就職した自発的海外赴任者と、あるいは留学後現地滞在をワーキングホリデービザを用いて延長した際に、一般企業で働いたものなどがいた。また帰任後の転職経験者は未経験者を上回った。5名には留学経験があり、また留学経験のないものの、海外での就業や言語習得にあこがれていたと述べるものも複数おり、海外での生活や勤務に関心の高いサンプルであった。

7. 研究協力者一覧（省略）

8. 分析焦点者の決定

分析焦点者は以下のように定めた。

「海外での就業から帰国し、日本で就業を続けようとする30~40歳代の日本人女性」

9. 分析ワークシート

（省略）

10. 概念生成とカテゴリー生成

（当日配布につき省略）

それぞれの段階を合わせて2カテゴリー、11サブカテゴリー、32概念を抽出した。

2つのカテゴリーは帰国後の職探し・配置決定にかかわるものと、就職後の職場での経験や相互作用に基づくものであった。

11. 結果図

（当日配布につき省略）

12. ストーリーライン

調査対象者のキャリアトランジションプロセスは大きく分けて2つの段階＜帰国後のマッチングーマーケットとの交渉＞＜帰国後の再適応＞からなる。＜帰国後のマッチング＞段階は、就職をめぐって労働市場を形成するエージェントや企業と交渉するプロセスである。これによってどの職場や職業に従事していくのかが決まっていく。この段階は【海外生活終了の意思決定の契機】から始まる。【雇先とのコミュニケーション関係の構築】とは職業・職務決定の際の相手とのコミュニケーション経路のことである。そうした経路から程度の差はあるものの、自らの希望が企業側に伝わり、雇用や配置の手配が行われる。特に、海外経験者の場合、これまでの経験を生かして海外業務追

求するかという【海外業務追求の希望をあきらめるか】の判断が一つのターニングポイントとなる。今後も海外業務をつづけられる仕事を得ることを希望する者には、その仕事にたどり着けるか、たどり着けないか、あるいは海外関連業務へのこだわりを捨て、海外出張や英語を使わない別なタイプの職務に転換していくかが重要な課題である。

このプロセスを構成するその他のカテゴリーは【自分のキーワードを重視する仕事選び】と【自分の市場価値の評価を受け止める】という自らの仕事環境と職務内容を選び取ろうとするが、外部からの評価に左右される部分もある、不確実性を含んだものである。【自分の市場価値の評価を受け止める】には、「他者との比較での自己評価」で評価された結果を受け止め不本意さを経験しながら耐えるプロセスがある一方で、「受け入れてもらえるという予感」を経験して安心するなどの、感情の揺れがある。また実際に海外業務以外の要件を検討していく際にも、【自分のキーワードを重視する仕事選び】がみられ、自分の判断によるものに加えて、「親や家族との調整」という、市場ではない他者との関係性に基づく相互行為が発生していた。

次の段階となる＜帰国後の再適応プロセス＞とは、採用配置のプロセスを経て、実際の職場に参加したのち、【現地と日本を比較して感じる違和感】を個人に対するストレスや圧迫感につながるような側面と、仕事の質やレベルへの要求水準が上昇していく経験をしながら感じていく。そうした違和感に対して個人が導き出すのが、【周囲の反応を見ながら、海外で身に着けた自分のやり方を調整し効果を上げる】という対応策である。この間に、【価値再検討の支援を受け止める】経験が入ることもある。こうした職場での適応プロセスの結果として、「好きな仕事ができているか」という主観的な評価と、「自分の本当にやりたい仕事のスキルをつけなおす」今後やりたいと思っている仕事のスキルを再度学習する行動がみられる。こうした主体的な行動の連続の中で各個人は職場への適応していくことになるのだと思われるが、それに反する作用をもたらすのが、【日本では女性が働きにくいという実感】である。そうした失望が、ほかの職場での適職探しや更なるグレードアップを目指した大学院進学へと後押しすることもあり、「転職の検討」につながるケースもある。実際に転職を実行する人たちは、前の段階の＜帰国後のマッチングマーケットとの交渉＞へ戻っていく。これに対して、個人的な環境への働きかけとして現れるのが、【結婚の希望をかなえた】という行動である。希望は帰国の前から発生していて、職探しの間には出てきにくいため、突然現れたようにも見えてしまう。この結婚の希望成就是展望におけるワークライフバランス希望に大きな影響をもたらす。

最後の段階として、たどり着くのは【将来の展望】という、今までの経験から今後のワーク、ライフに関する希望や望ましい展開を持つプロセスである。仕事のやり方をめぐる複数の価値が析出された。これらすべての価値を全員が保持するのではなく、個人ごとにどの問題にフォーカスするかという選択がある。

13. 当日までの活動の振り返り

上述の当日までの活動を振り返っての反省点は、まずなによりも、当初の M-GTA に適した研究かという点の判断が甘く、SV から KJ 法の法が適した分析なのではないかというご指摘をいただい

た後、慌てて、分析課題、概念生成とほぼすべてを自分で見直さなければならぬと思ひ込んでしまった。そのため、ワークシートと概念一覧を整えるのに時間がかかり、指導を受ける時間がなくなり、十分なコミュニケーションをとらないまま、報告会に臨むこととなった。今にして考えれば、ご指摘を受けた段階で、どのような角度から見直すべきかと、相談させていただいていれば、より豊かなコミュニケーションをとることができたのではないか。せっかくいただいた事前指導の機会を十分に生かせなかったことが何よりも申し訳なく、また、悔やまれる。

次に、ソフトウェアの利用についてである。自分は NVIVO12 という QDA 用のソフトウェアを利用している。QDA 用ソフトウェアについては、よい点と悪い点がある。よい点は、使いこなせば、バリエーションの管理や概念間の関係性のマッピングなどが比較的容易にできる上、修正も楽にできる点である。また、ログをとることができるので、最悪の場合、記録を参照することができる。悪い点は、簡単に概念生成の作業ができる分、ついついたくさん作りすぎること、全体のメモをとっていくのを忘れやすい点である。今後は十分に注意するとともに、より M-GTA にふさわしいフォーマットの工夫などしながら、こまめに確認できるように研鑽を積んでいきたいと思う。

第三に現象特性の部分については、まだ理解が足らず、よくわかっていないと思っている。この報告を書いている時点では、以前よりましにはなっていると思うのだが、今後定本などを参照しながら、理解を深めたいと思う。

14. 当日の感想: 質疑応答を中心に

報告会当日のディスカッションについては、以下の諸点が大変勉強になったし、今後も継続して学習、検討を続けなければならない点も確認できた。

まず、SV である竹下先生からのご指摘にあった、本研究への M-GTA の適用可能性についてである。報告会当日のフロアの先生を交えた議論でも、この点は理解に幅があるように思われた。相互作用として具体的にどのようなやりとりを想定すべきなのだろうか。社会的意識あるいは集合表象というようなものを個人が念頭に置いて、自らの実際とそれらとの距離や比較に基づいて、判断し行動を起こしている場合も M-GTA が適用可能なのだというご意見もあった。この点については、認知を含んではいけないということではないが、相互作用の分析があくまで中心に来るべきだという点に議論が収束していると感じた。

これと関連して、個人的には、研究協力者とのインタビュー時に、実際に誰と具体的に相互作用しているのかを聞き出すことが難しいことがあるように感じている。インタビューの時点で、相互作用を強く念頭に置いておかないと、関係性をうまく相手から引き出すことができず、婉曲で一般的な表現にとどまってしまう。時間的な制約の多いインタビューでは、特に留意が必要であると思われた。

また相互作用の相手という問題については、クロージングの際の木下先生のお話の中から、相手が必ずあるというご指摘をいただいた。「実践対象者を考えるとおのずと相互作用の相手が見える。」というご指摘に即して考えると、研究協力者が実践対象者とどのような相互作用を行っていたのかという部分を中心に分析が進んでいくべきなのだと気づいた。本研究の問題、さらには今後の研究に向けて、M-GTA で扱える相互作用、あるいは相手の捉え方について、もう少し関連の論

文を集めながら検討しなくてはならないと思った。今後も研究会に参加しながら理解を深めたい点である。

今回の研究の問題点との関連では、分析手法との適合性とともに、論点の掘り下げの不十分さが明らかになったと思う。フロアからは、よくわかったが、なぜ女性という限定をかけたかというご意見と、分析対象者と類似の経験をしているが、全くピンとこないというご意見があった。質疑応答の中で、分析焦点者をもっと具体的に表現するべきというご指摘をいただいて、「民間企業に従業員として就職しようとする」、「ノンプロフェッショナルな」女性たちの問題であるというような、限定をかける必要があるという結論に至った。よくわかったとおっしゃってくださった方は、おそらくこの研究が分析テーマや分析焦点者の定義のなかで、十分に言語化できていなかったコンテキストを共有している方なのかもしれないと感じた。そのコンテキストとは、それぞれの研究領域が持っている領域としての基本的知識のような部分と、分析対象者が住んでいる世界のよくあることというような部分が未整理のまま混在しているようであった。本研究の示そうとしていることが十分にテーマとして言語化できていないために、このような状況が発生したものと思う。この点については、もう一度先行研究に立ち返って、リサーチギャップの定義を精緻化し研究領域における課題として明確化すること、対象の特性を明瞭にした上、生成した概念が再構成する現実世界の特徴を捉えた上で、それらのあらかたを捨象し、現象の特性として議論するべきと感じた。

今回、入会してから間がないにもかかわらず、報告の機会をいただけたこと、心より感謝を申し上げます。また、ご多忙中にも関わらず、配慮づくりのコメントやコミュニケーションをいただいたSVの竹下浩先生には、ありがたい気持ち、申し訳なく思う気持ちでいっぱいです。心より御礼申し上げます。今後は研究会を通じてさらに学習しつつ、研究活動に活かしてゆきたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

研究会の皆様からの追加のご質問、コメントなどありましたら、是非お知らせください。

15. 参考文献

加藤 一郎・鈴木 竜太 2007 「30 代ホワイトカラーのキャリア・マネジメントに関する実証研究 ― ミスト・ドリフト・マトリクス視点から」経営行動科学第 20 巻第 3 号, 301－316

金井 壽宏 2002a 働く人のためのキャリア・デザイン PHP 新書.

金井 壽宏 2002b 仕事で「一皮むける」 光文社新書

木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い 弘文堂

内藤陽子 2009「海外からの帰任過程における問題とその支援」国際ビジネス研究第 1 巻 1 号、pp.1-17

内藤 陽子 2011 組織再社会化における情報入手行為と組織適応：海外帰任者を対象としたモデルの構築と検証 組織科学 45(1), 93-110,

内藤 2012 海外派遣からの帰任：組織への再適応とその決定要因 日本労働研究雑誌 54(9), 75-88,

内藤、陽子 2015 海外派遣帰任者の生活一般への再適応：日系多国籍企業での調査から

東海大学紀要. 政治経済学部、47 159-177

丹羽 孝仁 2018「現地採用で働く日本の若者 ―デュッセルドルフとバンコクの事例分析から」、
日本労働研究雑誌、No. 696/July 2018 pp.41-53

平野 光俊 1999 キャリア・ドメイン―ミドル・キャリアの分化と統合 千倉書房

古沢昌之 2011 日本企業の海外派遣者に対する人的資源管理の研究―駐在経験者への調査を
踏まえて―、大阪商業大学論集、, 第 159 号,

【SV コメント】

竹下 浩（筑波技術大学）

ご報告、お疲れ様でした。お約束通り、発表時に用いたメモを NL で共有します。冒頭で仰
られたような、定量的検証が当然の雰囲気（経済学・経営学・心理学など）の中で M-GTA
で成果を出すために、以下が少しでもお役に立てれば幸いです。

ページ数だけの引用は木下先生の「定本 M-GTA: 実践の理論化を目指す質的研究方法論」
（2020）です。（傍線や強調は筆者。文章の流れに合わせて一部修正。Glaser & Strauss の「気づき」
と「発見」、筆者コメント等木下先生以外の引用は、小文字にして書き出しを下げました）

1. 研究テーマ

M-GTA を含む GTA の目的は、社会的相互作用（人と人との直接的なやり取り）に関す
る理論（主に因果関係で示された社会的相互作用の分析モデル）の生成である（p.13）。

本書の焦点は、終末期患者と医療スタッフ間の相互作用の移行、各段階での相手への対処方略（駆け
引き）、相互作用と方略の移行条件、これらの関係者への影響である（「気づき」1965, 8）。

「社会的損失」＝看護師の思考が、終末期患者をどうケアするか（行為）に影響する。この視点（カ
テゴリー）があれば、看護師による患者ケア（方略）を説明・予測できる（「発見」1967, 23）。研究
者の仕事は、関連する行動や反応を説明できる理論を開発すること（同、p.30）。

M-GTA を用いた研究に共通する研究テーマは、対人援助（看護・保健・ソーシャルワー
ク・介護・リハビリ・臨床心理・教育・経営管理）における、実践的専門職の、人と人との
直接的な関わり合い（社会的相互作用）である（p. v）。

【アドバイス 1】

職場研究の場合、自分が「支援行為と相手の返報的行為」の存在しうる領域（例：組織
学習・技能発達・チームワーク・メンタリング・コーチング・産業カウンセリング等）に
関心があるか、ここで確認しましょう。

技術的にのみ理解しようとする学習者の姿勢が、混乱を招いている（木下,1999, 8）。M-
GTA の方法は具体的なので一見簡単そうに見えるが、「タダ乗り」は不可（p.64）。やり方

だけ手っ取り早く覚えて分析しても、質的分析は簡単にできないからだ。研究についての考え方や目的について、自分の考えを明確化（M-GTA 向きに）するのが先である（p.63）。

2. M-GTA に適した研究か

直接的対人援助における対面的な社会的相互作用で、GTA は実践を理論化できる（木下、1999, 16）。

（竹下）つまり GTA は、対人援助実践における対面的相互作用の理論化。では M-GTA は？

M-GTA の目的は、人間の行動を説明するモデル（理論）を生成すること（p.62）。具体理論（高齢者、認知症配偶者、障害児など）と領域密着型理論（ケアラー）があり（p.21）、人間の社会的相互作用を理解・説明・予測できる理論（p.68）。

領域密着型理論の目的は、実践者が対象者の行動や反応を予測・説明、状況を理解・制御可能にすることである（「発見」, 1967, 3）。

人間の相互作用は、心理学と社会学の接近法で解明できる（Newcomb, et al, 「社会心理学：人間の相互作用の研究」1965, vi, 初版 1950）。相互作用における互いの相手に対する出方は、それぞれの相手の考えについての推測に、大きく影響される（同, 18）。

社会科学者たちは（略）調査対象の問題へのフィードバックはきわめて貧困な状態にとどまっている。（略）新たな社会科学とは、イメージだけで言えば、「臨床的社会科学」とでもいうものになるのかもしれませんが（木下、1989, 50）。

（竹下）「被支援者の認知変容」だけの結果図を現場の対人援助者に示した際の反応は、「それで、明日から我々は、相手がどんな時に、具体的にどう対処したらいいのでしょうか？」でした。相手の頭の中は見えないのです。現場への対処任せは論文の書き逃げと同じで、M-GTA ではないと痛感しました。そこで次の研究では教材を制作、支援者研修で修正しました。今では、研修開発と効果検証を研究計画に含めています。

【アドバイス 2】

職場の認知変容だけでは M-GTA ではありません。そこで先例を見てみましょう。

横山（2006）：精神科ソーシャルワーカーの利用者との職業・自己観と対処方略の変容プロセス

木下（2007）：高齢者夫の妻の介護・夫婦観と介護プロセス

竹下（2009）：中国進出コンサルタントの依頼者との関係観と対処方略の変容プロセス

認知の向こうに支援関係が実在するプロセスが M-GTA であることが判ります。

3. 分析テーマへの絞り込み

人間行動の全てではなく、設定した分析テーマに限定される範囲で説明と予測する (p.63)。分析焦点者だけでなく、関連する重要な他者との関係と、その動態的側面である社会的相互作用を意識し、「誰と誰のどのような相互作用であるのか？」見ていく (p.80)。例えば、「高齢夫婦世帯における、夫による妻の介護プロセス」 (p.77)。

「プロセス」を入れる。分析焦点者を行為者としたときの他者との社会的相互作用と、それに関する重要な事柄を相互に関連付けて統合的に示すもの。特徴的な動きをとらえたもの (動態的説明理論)。人と人とは直接的に関わり合う社会的相互作用は、複雑で常に変化しているプロセスである (p.212)。

(ある研究者のご経験：20.11.13 付) 逐語記録を分析テーマに踏まえて改めて読むと、なんと無駄なことばかり聞いていることか！「何を知りたいのか」が明確になっていないと広く浅くなってしまい、結果として無駄なデータが増えるんだと感じることができました。一方で、再分析すると「こういうことか！」という発見もあり、研究の「わくわく」感を取り戻すこともできました。

4. 分析焦点者の設定

解釈における社会的相互作用の視点を確保するために用いる (p.63)。GT は一般的な社会的相互作用でなく、**特定の場と文脈** (例：援助職と利用者) で**関係づけられ、始まり・展開し・終わる** (木下、2003, 90)。双方の働きかけ、やり取りによって絶えず変化していく (木下、2007, 67)

(竹下) つまり、特定の誰かと「ペア」であること (不特定多数ではない)。あなたの分析焦点者は、実際の支援者ですか。被支援者の場合、相互行為的要素がインタビューガイドラインに含まれますか。

9. 結果図

関係者が、自分の役割を介して図に入ることができる。具体的に実践における応用方法を示せる (p.87)。

【アドバイス 3】

結果図の＜帰国後適応＞カテゴリーに、GT 生成の兆しがあります。

「帰国後適応」にはどのような段階 (周囲との関係性) があるかを示し、「各段階における相互の方略」と「移行条件」を解明すれば、将来の当事者や周囲が、状況を上手く制御できるので。

本人の思考・感情→	周囲への行為→	←周囲の反応→	本人の思考・感情
(私の) 海外式が先進なんだ！	海外式を主張・固執する	異端視する (職場の厄介者だ)	ストレス→転職検討
↓ 条件？			

(この人達の) 日本式の良さもあるんだ・	自分のやり方を調整し始める	共感→支援する(職場の一員だ)	WB↑(入社は正解、気分も好転)
↓条件?			
(一緒に) 折衷モデルを探索したい!	職場プロセスの改善提案をする	信頼→評価・相談する(率先者だ)	キャリアアップ&組織貢献感

これは下向きの継続的比較分析(結果図を見ながら、あるべき概念やカテゴリーを着想して、それを分析ワークシートや逐語記録等で確認すること。p.180, 181, 185)の例にすぎないので、そのまま鵜呑みにしないでください。あくまで分析者が理論的検討を行い、データに戻って検証して下さい。

【アドバイス4】

- ・結果図、概念リストの吟味(垂直方向と水平方向の比較による修正)
- ・矢印は、分析ワークシートの原因・結果欄や理論的メモノートで確認

【参考: KJ 法】

インタビュー逐語記録を何度も読み、カード化(見出しをつける)。類似したカードをグループ化、表札をつける。図解化(円・楕円・矢印)・文章化(表札順に)する。分類ではなく、(所与の)質的データから新たな意味体系を創出する共同作業(サトウら、2019)。

(例) 岡田・赤嶺(2015)「臨床心理実習での面接中断に対するクライアントと大学院生の認識の比較」教育心理学研究 41(1), 18-28

(竹下) 分析 WS 成立を複数協力者の語りで検証すること、下向きの継続的比較分析、理論的サンプリングによる追加的データ収集、理論的飽和の判断は、KJ 法では行いません。

以上、ご研究のさらなるご発展をお祈り申し上げます。

◇各地の M-GTA 研究会活動報告

北海道 M-GTA 研究会 活動報告

横山 登志子(札幌学院大学、北海道 M-GTA 研究会世話人)

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、前半の約 8 か月は例会を中止とし、10 月にオンラインミーティングでの例会を再開しました。研究報告を中心とする例会を隔月で 10 年以上重ねてきましたが、こんなに例会をお休みしたことはありませんでした。それほど大きな出来事でしたし、参加者の皆様の本務(大学や病院、支援現場)においてそれぞれ

にご多忙だったと思います。そのなかで開催にむけた期待の声もいただき、Zoomでの例会となりました。例会の内容は以下のとおりです。

・日 時：2020年10月31日（土）13:30～17:00

ZOOM ミーティング

・参加者：11名（うち、2名は新規メンバー）

・世話人：横山登志子（札幌学院大学）

塩川幸子（旭川医科大学）

・発表者：青陽千果さん・金玉禮さん

・研究発表内容：

①青陽 千果さん

テーマ「適応および不適応についての一般の人の捉え方に関する研究」

検討内容：研究計画および分析に向けての検討。

②金 玉禮さん

テーマ「子どもの不登校が影響した母子世帯の母親たちの困難な生活環境について考える」

検討内容：分析ワークシートの検討。



久しぶりの研究会でしたが、オンラインにもかかわらず非常に活発な意見交換が行われ、予定の時間ぎりぎりまでやりとりがありました。いずれの発表も熱心でパワフルな問題意識があり、それに触発されて、参加者もおおいに刺激をうけた例会でした。

北海道 M-GTA 研究会では、隔月で2～3つの研究報告の発表と質疑を行っています。オンラインでの例会開催が続く予定ですので、参加ご希望の方は世話人の横山までご連絡ください（ty71kori@sgu.ac.jp）。

西日本 M-GTA 研究会 活動報告

田川 雄一（広島国際大学、西日本 M-GTA 研究会世話人）

西日本 M-GTA 研究会 活動報告（2019年度を中心に）

本研究会は、大学院博士前期課程（修士課程）を修了していることを参加要件としている現在会員数40名程度の研究会です。年3回程度の定例会にて会員の研究報告をもとにグループスーパービジョンを行い、年度末には外部講師の招聘などによる年度末研究会を実施してきました。会員相互で事務局を引き継ぎ、研究会を自主運営し、研究論文（博士論文）を書く必要がある人を支援することを主な目的としています。2019年度の活動状況は以下の通りでした。

2019 年度の活動状況

	日時	発表者	参加者	場所
第 47 回	5 月 19 日	2 名	21 名	新大阪： 大阪コロナホテル
第 48 回	9 月 15 日	2 名	17 名	新大阪： キング会議室
第 49 回	11 月 17 日	2 名	10 名	新大阪： キング会議室
第 50 回	2 月 16 日	3 名	34 名	新大阪： 大阪コロナホテル

3 回の定例の研究会に加え、2020 年 2 月には年度末研究会では初の試みとして「博士論文報告会」を実施しました。開催の目的は、先述した「博士論文を書く必要のある人を支援する」という本研究会の活動成果を共有し、また博士論文の提出を目指している参加者や現在 M-GTA で分析を進めている参加者に研究を進める道筋を照らす機会とすることでした。内容は、本研究会でグループスーパービジョンを受け、M-GTA を研究方法として博士論文を執筆し、学位取得をした以下 3 人の会員による博士論文の発表です

・大友秀治氏（北星学園大学）「スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョン実践モデルの生成－参加型評価を活用したエンパワメントに着目して－」

・増井 香名子氏（新見公立大学）「DV 被害者が DV 被害から「脱却」するプロセス－当事者インタビューの分析から支援モデルの提唱－」

・高木健志氏（現 佛教大学）「長期入院精神障害者の「退院の意思決定」を支えるソーシャルワーク実践に関する研究」

それぞれの報告者からの発表のあとは、シンポジウム形式で参加者からの質問に 3 人の報告者が自身の経験や見解を述べてもらいました。そのなかで、参加者全体での討議にも発展し、実践例を通して大いに M-GTA について深めて検討する機会となりました。報告者からは「博士論文で得た知見はこれで完成ではなく、実践で使い、修正し応用していく」「今回発表の機会を得ることで自らの博論を振り返る貴重な機会となった」という感想が聞かれ、参加者からは「インタビュー方法から分析まで困っていたことに対す



るヒントを得ることができた」「報告を聞いて自らの研究を進めていきたいというモチベーションが高まった」などの感想を得ました。

実施にあたり今回初めて他地域研究会にも参加案内を行い、他地域 M-GTA 研究会所属の会員 16 名の参加がありました。その後の懇親会では、それぞれの研究についての情報交換が活発になされ交流をさらに深めました。

西日本 M-GTA 研究会の開催は 50 回を迎えていますが、紆余曲折を経ながらもこれまで、会員たちが互いに支え研究活動を活性化するためにと会を支えてきたという歴史があります。無理のない形での運営を行うという形をとってきたこともあり、2020 年度は新型コロナウイルスの影響を受け活動の休止を決定していますが、再開した際には、会員相互で研究活動を支援していくための場として会員相互で本研究会を盛り上げていきたいと思えます。



【会員による博士論文発表の様子】

◇近況報告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード、(5) 内容

(1)阿部オリエ

(2)日本赤十字九州国際看護大学

(3)看護学

(4)看護上の判断、臨地実習指導者、臨床判断、関わり、看護系大学生

(5)臨地実習における看護系大学生のケア実施に伴う看護上の判断育成に向けた臨地実習指導者の関わりをテーマに、分析方法に M-GTA を用いて研究を行い、学位論文を作成しました。現在、学会誌投稿に向けて準備を進めているところです。規定の枚数におさめる為、試行錯誤しています。

(1)猪嶋孝典

(2)三井物産人材開発株式会社

(3)組織開発・人材育成

(4)事業経営力強化、シニア人材活躍推進

(5)はじめまして。2020年9月より入会いたしました三井物産人材開発の猪嶋と申します。当社は、三井物産及びグループ各社を対象とした、教育・研修の企画運営を行っております。私がM-GTAに出会ったのは「事業経営力強化」のプロジェクトで行った経営人材へのインタビュー時です。

これまでインタビューを実施しても、そのデータを活かしきれなかったことから、上司より「M-GTA」を紹介されました。

21名へのインタビューを行ったのち、木下先生の書籍を拝見しながら、試行錯誤しながら、素人なりに「12の概念」の抽出と「4つのカテゴリー」の生成にいたりしました。

振り返ってみて、分析内容より先に、私の脳みそが飽和状態になることばかりでした。

社内プレゼンの結果は、関係者からはユニークなアプローチとして、私の想定を上回る評価を受け、事業経営人材の育成プログラム検討の土台として活用しております。

現在、新たな案件として、「シニア人材活躍推進」の施策検討の土台となる分析を行っており、脳みそから汗を流しております。

まだまだ駆け出しの若輩者ではございますが、研究会の参加等を通じて、レベルアップできればと存じておりますので、引き続きご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

.....

◇次回のお知らせ

2021年1月23日(土) 会員限定シンポジウム

時間：13:00～17:00

場所：オンライン (ZOOM 開催)

.....

◇編集後記

新型コロナ感染の拡大が続き、日常生活は様変わりしました。

Zoomによるオンライン開催で、2回目の研究会が開かれました。

私は初めての参加だったのですが、場所が大学の教室であっても、Zoomであっても、熱気は同じだなと思いました。このニューズレターも、研究会の続きのように、読み応えのあるものに

なっていると思います。とりわけ、SV コメントが、1 人のスーパーバイザーに向けて書かれているだけでなく、他の研究者たちに役立つものであり、さらに、他のスーパーバイザーたちにも役立つものになっていると発見しました。ぜひ、皆さんもじっくり目を通してみてください。
(丹野ひろみ)